江戸時代の漢字学習

　江戸時代の日本語は、中世の和漢混交文の伝統を受けて仮名交じり文で表記される伝統が定着していたので、寺子屋でも仮名の学習の次の段階として、漢字の学習も熱心に行われていました。

　「いろは」（仮名）から習いはじめ、次に数字へと進み、さらに『名頭（ながしら）』『国尽し（くにづく）』、『村名（むらな）』『郡名（こおりな）』、『商売往来（しょうばいおうらい）』『消息往来（しょうそくおうらい）』『庭訓往来（ていきんおうらい）』などの往来物（おうらいもの）（教科書）を使った漢字学習へ進むのが一般的なかたちでした。また、中国から伝来した『千字文（せんじもん）』もさまざまな種類のものが作られ、漢字の教科書として全国的に使われていました。

　子どもたちは師匠から手本を少しずつもらい、それを真似て書くことをくり返し練習することで、文字の知識だけでなく生活常識なども身に付けました。

『童子初学富貴用文世海蔵』1751 年（宝暦 1）桜井市兵衛家文書　N0055-00921（当館蔵）
『商売往来絵字引』年未詳　勝見宗左衛門家文書　B0037-00709（当館蔵）

○漢字の「教科書」いろいろ

『名頭（ながしら）』

源、平、藤、橘、孫、彦・・で始まる、姓や名前によく使われる漢字集であり、二百数十字ある。

『国尽し（くにづく）』

五畿内（山城、大和、河内、和泉、摂津）のあと、東海道、東山道、北陸道・・と分類して旧国名を列挙したものである。

『村名（むらな）』『郡名（こおりな）』

それぞれの地域の寺子屋周辺の村や郡の名を書き綴ったものである。地方ごとに独自もものが作られた。

『商売往来（しょうばいおうらい）』

商人向けに商業にかかわる用語、産物名や熟語を多く盛り込んでいる。

『消息往来（しょうそくおうらい）』

手紙に使われる熟語を集め示している。

『千字文（せんじもん）』（資料展示・別パネル参照）

天文、地理、政治、歴史などの森羅万象について述べた、重複のない千の漢字を四字一句とする二百五十句からなる韻文。

『小野篁歌字尽（おののたかむらうたじづくし）』（資料展示）

なんらかの意味で類似している漢字を一行にならべ、これに和歌をそえて、覚えやすいように配慮している。